

子ども・家庭支援に向けた地域アセスメントシートの開発研究

A study on the design of community assessment sheet for the children and family support

加藤 悦雄¹

¹大妻女子大学家政学部

Etsuo Kato¹

¹Faculty of Home Economic, Otsuma Women's University

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

キーワード：生活，地域アセスメント，子どもの権利

Key words : Life, Community assessment, Children's rights

抄録

子ども計画づくりの定着や子育て支援サービスの拡大にも関わらず，子どもの貧困や虐待など子どもを取り巻く地域の課題は深刻化している．こうした状況に対して，地域における子ども支援専門職や地域住民などが，子どもの生活圏を基盤として問題把握に取り組み，その解決策を導き出す取り組みが求められている．本研究では，その方法としてコミュニティワークの初期段階に位置する地域アセスメントに着目し，先行する地域アセスメントシートの検討などを通して，子どもの権利を基盤とする地域アセスメントシートの作成に取り組んだ．その結果，「基本設定」「地域指標」「子どもの生活指標」によって構成される「地域アセスメントシート」，および把握された課題を整理し支援計画を導き出すための「課題整理シート」とそれぞれの活用方法を明らかにした．

1. 研究の目的

子ども福祉領域における自治体子ども計画の定着によって，5年毎にニーズ調査に基づく子ども支援計画が策定されている．現在，こうしたプロセスを経て作り出されたサービスが数多く存在するにも関わらず，必要な支援に結び付かず地域で孤立した子どもや子育て家庭が数多く生じており，子ども虐待や貧困問題の深刻化，地域における子どものマイノリティ化が進んでいる．

その背景には，中央官庁から降ろされてくる法定サービスに問題を当てはめて解決を促そうとする手法の問題，さらに公的支援機能が集約されることでかえって市民社会によるインフォーマルな支援が退却してきた問題などが考えられる．子どもにとってより身近な地域レベルから問題を把握し，その解決策を導き出していくことが必要であり，その方法としてコミュニティワークに着目することができる．コミュニティワークを実践する上で，地域の課題や強みなど支援計画の基礎資料を把握する地域アセスメントの取り組みが重要である．しかしながら，これまで子ども支援を目的とする地域アセスメントおよびその方法論の蓄積

は十分に行われてこなかった．

子ども支援を視野に入れた既存の地域アセスメントシートとして，高度経済成長期直後に，子ども固有の問題把握を企図して発表された，①子どものシビル・ミニマム指標^[1]および②子どもの生活圏指針^[2]，課題解決を後押しする地域の強みの把握を企図した③地域福祉のアセスメントシート^[3]，子どもの権利内容の具体化を目指す④子どもにやさしいまちアセスメントツール^[4]を取り上げ，分析を行った．その結果，子ども・家庭支援に向けた地域アセスメントを展開する要件として，①問題状況等を可視化させることに寄与する指標（問い）を設定するという，②子どもや家庭の生活状況等を正しく把握し，解決策に結び付けていくための実践方法を工夫することを確認することができた．

前者に関して，何をもって子どもたちを取り巻く問題状況と見なすのか，逆に言えば子どもにとって善い（ふさわしい）状況とは何か判断するための基準が問われてくる．すなわち，アセスメントの指標またはその使用方法に，望ましさ（または善さ）に関する価値によって基礎づけられた指

標(問題をあぶり出す“問い”)を盛り込むことで、これまで人びとの目に十分映し出されてこなかった問題状況を可視化していくことにつながるのである。

次に、後者に関して、どのようにしたら地域における子どもや家庭の生活実態を正しく把握できるのか、さらに、その取り組み自体が子どもに望ましい地域づくりに結実するような工夫された方法を用いる必要がある。子どもの生活圏指針の基本的条件には、特定の子どもの(子どもの発達段階や生活している子どもの様子)を想定して指標を用いること、関心を同じくする複数の人びとが集まって議論することの大切さが示されていた。また、子どもにやさしいまちアセスメントツールに関して内田塔子は「地域に住むおとなや子どもが、ファシリテーターの支援のもとにグループディスカッションを行いながら」取り組むという方法に着目している^[5]。

以上のような要件を考慮して、本研究は子ども・家庭支援に向けた「地域アセスメントシート」とその方法、および把握された課題を整理し、支援計画に結び付けていく「課題整理シート」とその方法について明らかにする。

2. 研究の方法

本研究では以下の手続きに基づき、シートの作成に取り組むこととした。アセスメントの指標は、「子どもの権利に関するグローバルスタンダードである子どもの権利条約」^[6]の趣旨に則った内容にする必要がある。さて、児童福祉(子ども家庭福祉)が対象とする生活(Life)という用語は、もともと生命・暮らし・人生という複合的意味合いを内に含んでいるが、その内容に子どもの権利条約の趣旨を反映させ、子どもにふさわしい生命・暮らし・人生の状況としてあらわすと、表1のように定義することができる。

表1. 子どもの生活概念
(子どもにふさわしい生命・暮らし・人生の状況)

- | |
|--|
| ①生命...かけがえのない生命であり固有の物語を生きる存在である子ども一人ひとりを慈しみ尊重していくこと。 |
| ②暮らし...子どもの育ちに欠かせない衣食住等の生活財や環境の豊かさを確実に途切れることなく整えていくこと。 |
| ③人生...子どもがこれからの人生を主体的に生きていくため、他者とのつながりなど生きていく糧となる出来事を育んでいくこと |

以上のような子どもにふさわしい状況を具体化するために、地域でどのような条件を整えていく必要があるのか。このことに関して、子どもの権利内容(子どもの権利条約条文)^[7]を参照し、項目化を図ることにより「子どもの生活指標」を作成することとした。さらに先行研究(先述した4種類の地域アセスメントシートとその方法)の検討を通して、その他の関連する指標を作成することとした。

3. 結果

以上のような手続きを通して作成した子ども・家庭支援に向けた地域アセスメントシート(基本設定、地域指標、子どもの生活指標の3つのパートで構成)、および課題整理シートとその方法を以下に示していく。

3-1 基本設定

基本設定項目として、「地域アセスメントの目的」「対象とする地域圏域」「想定する子どもの特徴(課題属性・対象年齢・家庭状況等)」「地域アセスメントの方法・工夫」、備考欄を設けている。地域アセスメントの実践者は、子ども家庭支援の専門職のみならず、子ども本人や子育て当事者、さらに関心のある地域の人びとである。

地域アセスメントの実施に先立って、地域の特徴や子どもの生活実態を適切に把握する工夫などについて話し合う際に使用するシートであり、①対象とする地域圏域を限定すると同時に、特定の子どもの様子を具体的に想定して臨むこと、②子どもに寄り添う一貫した姿勢を保ち、効果的なグループワークの活用や対話(dialogue)を基調とした話し合いに努めることが求められる。

表 2. 基本設定シート

年 月 日

・地域アセスメントの実践者（メンバー）：
・地域アセスメントの目的：
・対象とする地域圏域：
・想定する子どもの特徴（課題属性・対象年齢・家庭状況他）：
・地域アセスメントの方法・工夫：
<備考>

3-2 地域指標

地域指標の目的は、子どもの生活状況に直接的・間接的に影響を与えている地域社会の特徴を把握し、その後の効果的な課題解決・改善活動の手がかりを取得することである。地域指標項目と

して、「地域の特徴（基本統計・物理的特徴・歴史他）」「社会資源の状況（公共施設・サービス、および住民組織・市民団体・人材・生活関連産業等）」「主な地域課題」、備考欄を設けている。

表 3. 地域指標シート

年 月 日

・地域の特徴（基本統計・物理的特徴・歴史他）：
・社会資源の状況（公共施設・サービス、および住民組織・市民団体・人材・生活関連産業等）：
・主な地域課題：
<備考>

3-3 子どもの生活指標

子ども・家庭支援に向けた地域アセスメントシートの中心が子どもの生活指標であり、その目的は、対象とする地域生活圏における子どもの生活

実態を把握することである。子どもの生活指標項目は、子どもの生命の保障に関する4項目、子どもの暮らしの保障に関する4項目、子どもの人生の保障に関する4項目の全12項目によって構成さ

れている。

子どもの権利を基盤とする子どもの生活指標は普遍的性格をもつ一方で、ここに提示した状況を具体化する手段は、地域社会（子どもの地域生活圏）の特徴によって当然違いが生じることとなる。そのため各項目の問いは実践者による考察の余地を残した表現となっている。対象とする子どもや地域の様子を具体的に思い描き、子ども参加のフィールドワークやグループヒアリングなどを用いて取り組むことが大切である。

それぞれの指標の問いに対して、「可能である」「不十分である」「不可能である」の3段階で評価し、そのように判断した根拠を過不足なく記述する必要がある。具体的には、各指標に示した内容が可能になっていると判断した根拠、またはそれが不十分・不可能な状態であると判断した根拠を、「子どもがその身を置く状況」「子ども自身の体験していること」「子ども自身の気持ちや考え」などの観点から把握・分析することが望まれる。

表4. 子どもの生活指標シート

年 月 日

子どもたちが生きている状況を点検する指標	点検基準とその根拠（コメント）	
	可 能である○ 不十分である△ 不可能である×	・子どもがその身を置く状況、・子ども自身の体験していること、・子ども自身の気持ちや考え等の観点から左記のように判定した根拠
1. 子どもの生命...かけがえのない生命であり固有の物語を生きる存在である子ども一人ひとりを慈しみ尊重していくこと		
1-1 子どもがその生命や存在（アイデンティティ）を脅かされる状況（例えば、虐待・暴力、いじめ、差別、ネグレクト・孤独、過干渉・管理、危険・脅威等）に陥っていないか		
1-2 生命や存在が脅かされる危険にあるとき、子ども自身で助けを求めることのできる身近な支援者や救済機関（子どもオンブズマン等）が確保されているか		
1-3 子どもの身近なところに、伸び伸びと遊び、自然に触れ、ゆっくり休息を取るなど、自分らしく・安心して過ごすことのできる場所（地域の拠点）が十分に確保されているか		
1-4 地域の人びとによって日頃から、さまざまな子どもを決して排除することなく、あたたかく見守り包摂していかうとする態度や取り組みが行われているか		
2. 子どもの暮らし...子どもの育ちに欠かせない衣食住等の生活財や環境の豊かさを途切らすことなく確実に整えていくこと		

<p>2-1 子どもは栄養のある食事，安心して過ごすことのできる住居，年齢に応じた日用品等が与えられるなど，身近な保護者や地域の人びとによって大切に育てられているか</p>		
<p>2-2 子どもの身近な保護者による安定的な養育能力（基本的ケア・情緒的温かさ・刺激等）が確保されているか．また，そのために必要な支援を受けることができているか</p>		
<p>2-3 子どもはさまざまな情報に触れ，また望ましくない情報から守られるなど，有意義な情報に接する機会が与えられ育つことができているか</p>		
<p>2-4 子どもの地域生活圏は，自然に触れたり，スポーツや文化活動に取り組めるなど，子どもにとって実りの多い魅力的な場所となっているか</p>		
<p>3. 子どもの人生...子どもがこれからの人生を主体的に生きていくため，他者とのつながりなど生きていく糧となる出来事を育んでいくこと</p>		
<p>3-1 子どもは自らの価値観の広がりや寄与するような，多様な人とのつながり（異年齢集団，異文化・他宗教他）に触れる機会をもって生きることができているか</p>		
<p>3-2 子どもの身近なところに子どもの思いや考えを受け止め，その声を聴こうとする人びとや場面があり，子どもは自分の意見を伝え，考えを表現することができているか</p>		
<p>3-3 子どもが物事を自分で決めたり・大切な決定に参加するなど，主体的に活動して生きていくことのできる場面が十分に確保されているか</p>		
<p>3-4 子どもは自分がその時にやりたいと思ったことをあきらめることなく取り組み，日々成長していることを実感し，おとなになることへ希望を抱くことができているか</p>		

3-4 支援計画に向けた課題整理

地域アセスメントを通して把握された調査結果は、課題解決・改善に向けた次のステップにおいて活用しなければならない。それでは多種多様な情報を支援計画づくりに向け、どのように整理することができるだろうか。課題整理に向けたフレームワークとして活用するシートが課題整理シートであり、「課題番号」「課題タイトル」「把握され

た課題内容の要点」「課題内容とその根拠（現状分析）」「目標設定」「課題解決の手がかり」の項目によって構成されている。課題整理シートは、言わば相互に関連しあった問題群を切り分けると同時にそれらを課題解決の手がかりと関連させ、一つひとつ課題タイトルを付して整理するシートである。

表5. 課題整理シート

年 月 日

課題番号：	課題タイトル：
把握された課題内容の要点（子どもの生活指標の観点から）	
課題内容とその根拠（現状分析）	目標設定
（子どもがその身を置く状況について）	➡
（子ども自身の生活体験について）	➡
（子ども自身の気持ちや考えについて）	➡
課題解決の手がかり（子どもの生活指標・地域指標、および活動自体からの手がかり）	

4. おわりに

子ども・家庭支援に向けた地域アセスメントシートは、現場において実際に用いられ、子どもが生活している状況の改善に寄与してこそ本当の価値が生じる。本研究と関連した研究成果^{[8][9]}が、子ども支援の現場における学習会の資料として活用されているが、今後、そうした現場の意見と同時に子ども本人の意見を汲み取り、実践例などを加味した内容に改善し、より使いやすく有効な方法論として提示することを目指したい。

付記

本研究は大妻女子大学戦略的個人研究費（課題番号 S2611）の助成を受けたものである。

引用文献

- [1] 一番ヶ瀬康子・寺脇隆夫・小川信子・松本園子（1976）「児童のシビル・ミニマム保障の体系」『児童問題講座第1巻 児童政策』ミネルヴァ書房、195-222
- [2] 窪田暁子（1969）「子どものための生活圏計画」『子どもの生活圏』日本放送出版協会、156-168
- [3] 小野敏明（2009）「コミュニティソーシャルワークにおける地域アセスメント」『コミュニテ

- イソーシャルワーク 3』日本地域福祉研究所, 24-31
- [4] UNICEF Innocenti Research Centre (2011), A Child Friendly Community Self-Assessment Tool for Community Service Providers and Child Advocates
- [5] 内田塔子 (2013) 「ユニセフ『子どもにやさしいまち』づくりの社会的背景とその特質」『ライフデザイン学研究』第 8 号, 東洋大学ライフデザイン学部, 44
- [6] 荒牧重人 (2013) 「子どもにやさしいまちづくりの展開と課題」『子どもにやさしいまちづくり [第 2 集]』日本評論社, 5
- [7] 喜多明人・森田明美・広沢明・荒牧重人 (2009) 『逐条解説子どもの権利条約』日本評論社
- [8] 加藤悦雄 (2015) 『子ども・家庭支援に向けた地域アセスメントシート』大妻女子大学家政学部児童学科
- [9] 加藤悦雄 (2015) 「子ども・家庭支援に向けた地域アセスメントの要件に関する検討」『こども臨床研究』第 2 号, 大妻女子大学家政学部児童臨床研究センター, 44-60

Abstract

Child poverty and child abuse are getting intensified in spite of expansion of child plan forming and family support service. Community workers and social workers for the children works on problem grasp based on child's range of livelihood and derives the countermeasure are desired. I aimed at the community assessment which is the early stage of the community work and worked on making of existing community assessment seat based on child's right through consideration of an area assessment sheet by this research. Community assessment is part of a process used to plan child friendly policies. As a result, I designed the community assessment sheet including child's index of living condition and the problem arrangement sheet.

(受付日 : 2015 年 12 月 10 日, 受理日 : 2015 年 12 月 21 日)

加藤 悦雄 (かとう えつお)

現職 : 大妻女子大学家政学部児童学科准教授

東洋大学大学院社会学研究科社会福祉学専攻博士課程単位取得退学。

専門は社会福祉学。現在は、子どもの権利を基盤として、社会的排除の視点による非行問題の理解と非行少年の支援、地域における子ども支援専門職の対話的関わりを主とする専門性などの研究を行っている。

主な著書・論文 :

子どもにやさしいまちづくり [第 2 集] (共著, 日本評論社, 2013)

子ども・家庭支援に向けた地域アセスメントの要件に関する研究—子どもの権利と生活の視点から—, こども臨床研究第 2 号, 44~60 頁 (単著, 大妻女子大学家政学部児童臨床研究センター, 2015)

子どもの権利条約 20 年の成果と課題 児童福祉領域, 季刊教育法 183, 43~48 頁 (単著, エイデル研究所, 2014)